

Go
For
it!

がまだす People

前に
進む!

未来につなぐ 私たちの一歩



校区を歩き危険箇所をチェック！自分たちで作るハザードマップ

中央区 京陵中学校

京陵中の2年生に事前説明を行う
中央区総務企画課防災担当の志方修二さん

災害が起きた際に避難できる指定避難場所や、災害が起きやすい場所などを、前もって知っておくことはとても大切なことです。熊本地震の際は、「自分たちが住む地域の指定避難場所がどこか分からず困った」など、さまざまな声が聞かれました。

そこで、京陵中学校(南弘一校長)の2年生が、実際に校区を歩き、危険箇所や避難場所、公共施設の位置、崖崩れが起きそうな場所などを確認し、それらを地図に書き込むハザードマップ作りを行いました。

9月29日には、まち歩きに先立ちマップづくりのポイントなどの事前説明がありました。中央区総務企画課の防災担当・志方修二さんが、「災害が起きた際は、まずは安全に逃げるのが最優先。そのためには、いつ同じような地震が起こるか分からないという意識を持って生活することが大切」と生徒たちに呼び掛けました。

自分たちが住むまちについて知るところから

10月1日は、高平台(北区)、池田(西区)、壺川(中央区)、西里(北区)校区に分かれ、約1時間半まちを歩きました。高平台小学校周辺は、坂の多い住宅地。「避難する際に危険な場所、大雨のときに水があふれそうな場所など、気付いたところを地図に書き込んでみよう」と、北区総務企画課の防災担当・上村幸嗣さん。地震の際に亀裂が入った壁や急な階段、水があふれそうな用水路など、子どもたちが危険と思う所をチェック。写真係は、その場所を撮影していました。大橋由吏花さんは「実際に住んでいる所なのに、知らない場所がこんなにあるとは。もしもの時を考えて、安全に避難できるように確認しておこうと思いました」と話していました。

中学校に戻り、すぐにハザードマップ作りをスタート。池田校区を歩いた岩本隼翔君は、「石垣が今にも崩れそうになっている所もあり、早く復旧してほしい」と、地図に危険箇所を書き込んでいました。

実際に歩いてみると、大人と子どもの気付きは全然違うそう。「自分たちが住んでいるまちがどんなところなのかを知ることから始めてみるといいですね」と同課の松村優子さん。子どもたちの防災への関心がさらに深まったようです。



「小学生が水路をのぞき込んで落ちそうになっていた」という場所も



記録係と写真係に分かれ、まちの危険箇所をチェック



道路や水路などを色分けし、その後に危険と想った場所・公共施設などを書き込み、実際に現場で撮った写真を貼っていきます

迷子札の取り組みが功奏
全国からペットフード等支援物資

東区 熊本市動物愛護センター



迷子になったり、負傷したり、またやむを得ない事情で飼えなくなった犬猫を保護収容している動物愛護センター。地震後は、敷地内に地割れが発生、擁壁などが崩壊する被害に見舞われました。ライフラインが使用不能となり、清掃用の水もストップ。職員が湧水地に水汲みに行くなど奔走しました。

「地震直後は、迷子になった犬猫を探す張り紙が通常の10倍。問い合わせも約280件に上りました」と、同センターの村上睦子所長は振り返ります。センターの収容数は通常の5～6倍に。「しかし、飼い主の元へ戻る数も多かった」と村上所長。

功を奏したのが、地震前から同市動物愛護推進協議会と取り組んでいた「迷子札をつけよう100%運動」。犬猫を探す際の連絡先が飼い主へ周



「月に1回の日曜の譲渡会を利用してほしいです」と、写真左から村上睦子所長、トリマーの河端梓さん

知できていたことが、返還率の高さに結びつきました。

地震後は、全国からペットシートやフード等の支援物資がセンターに届けられました。協議会の推進員の協力でペットと一緒に仮設住宅に入居している世帯への配布も実施。仮設住宅では、犬猫のしつけ教室や一時預かり等の他、入居者向けに混合ワクチン費用の助成等、幅広い支援を行いました。

震災後1年半を過ぎ、自宅の解体でやむを得ず飼えなくなったという相談が増加。「収容できる数には限りがあります。譲渡会などで命をつなげる活動を広めていきたい」と村上所長。飼い主に委ねられている犬猫の命について、いま一度考える必要があるようです。



地割れが発生し、崩れ落ちた擁壁

寄付された電子ピアノが活躍
笑顔の歌声高らかに！

西区 睦さくら会



城西1町内のふれあいセンターで、体操をしながら童謡や唱歌を歌う音楽サークル「睦さくら会」。同校区の老人会から発足し、月に2回地域の高齢者24人が参加しています。

地震後は、活動拠点のふれあいセンターが避難所となっていたため練習を休止。しかし、自宅が全壊し、引っ越すことになった地域の人から電子ピアノの寄付を受け、5月18日にサークルを再開しました。

「今回の地震はつらいこともたくさんありましたが、電子ピアノの寄付など、いろんな方から元気をいただきました。ますます元気になるよう、楽しく歌いましょう！」と声を掛ける歌の指導役・小澤ますみさん。

「どんぐりころころ」の歌に合わせて、背中を伸ばしたり、足を上下させ



歌に合わせて体を動かすと、楽しく運動できるそう

たり。体をほぐした後、いよいよ歌の練習が始まります。

ひととき大きく、きれいな声で皆を先導するのは、リーダーの吉川文夫さん。78歳とは思えぬ歌声が、センター内に響きます。

「サークルに参加するようになって気持ちが明るくなった」という森谷満子さん。練習の合間の皆とのおしゃべりも楽しいひとときです。

「普段の生活の中では、大きな声を出す機会がないのですが、気兼ねなく、大きな声で歌うことは、ストレス発散と同時に嚥下機能の改善にもなるそうですよ」と小澤さん。今後も、歌の練習を積み、文化祭や祭りなど地域の行事に参加予定。高らかな歌声が、地域に元気を与えています。



歌の合間にお茶とお菓子で休憩